

# 北方四島交流事業理解促進セミナー (別海町) 開催結果報告書

(目次)

I 開催概要 .....	1
II 講話要旨 .....	3
1 テーマ:「北方四島交流事業の現状」 講師:工藤 伸子(北方四島交流北海道推進委員会)	
2 テーマ:「戦後の北方領土」 講師:上杉 とみえ・上杉 謙一(元島民2世(色丹島))	
3 テーマ:「通訳者からみた四島交流」 講師:塚本 三樹夫(ロシア語通訳者)	
III アンケート結果 .....	7
IV 資料 .....	11
1 広報資料(チラシ:開催要領を含む)	

令和7年1月

(公社)北方領土復帰期成同盟  
(北方四島交流北海道推進委員会)

# I 開催概要

## 1 目的

北方四島交流事業の理解促進を図る一環として、北方領土隣接地域及び交流の窓口として当初から連携・協力を頂き事業を展開してきた根室管内別海町において、関係者や一般の方々に北方四島交流に対する関心を持ち続け理解を深めて頂くため、セミナーと写真展示を行った。

2 主催 (公社)北方領土復帰期成同盟 (北方四島交流北海道推進委員会)  
別海町

3 日時 令和6年12月7日(土) 13:30~16:00

4 場所 別海町生涯学習センター(みなくる)2階会議室

5 テーマ 「共に考える四島交流」

## 6 講話【テーマ及び講師】

元島民2世、ロシア語通訳者等から、四島への渡航やロシア人住民との交流に参加した実体験を踏まえて、各々の立場と視点から講話をいただいた。

- ・「北方四島交流事業の現状」 北方四島交流北海道推進委員会 工藤 伸子
  - ・「戦後の北方領土」 元島民2世 上杉 とみえ 氏、 上杉 謙一 氏
  - ・「通訳者からみた四島交流」 ロシア語通訳者 塚本 三樹夫 氏
- その他：北方領土問題啓発動画の上映(セミナー開演前)

## 7 参加対象及び参加者数

四島交流事業の関係者、一般の方(別海町内外)を対象に、32名参加  
※関係者=交流協力団体、ホームビジット受入家庭等

## 8 写真展示

(1) 日時 令和6年12月7日(土)9:00~12月8日(日)15:00

(2) 場所 別海町生涯学習センター(みなくる)1階ホワイエ

(3) 展示写真等

- ・事業記録写真 37枚、事業紹介パネル、  
北方四島の地図、四島の景勝地や施設の写真 12枚、  
別海町との交流紹介コーナーに「サンキューの会」提供の寄せ書き、絵手紙、写真等
- ・サイネージによる北方四島訪問事業の動画上映(「サンキューの会」提供)

(4) 観覧者 126名

## 9 総括・所感

参加者からは「普段聞くことのできない話が聞けて、非常に勉強になった」「交流事業が相互の理解促進に大きな役目を果たしていることを知り、再開につなげていく努力が必要と感じた」「元島民や2世の方々がどんな想いで活動しているかが伝わって来た」等の声が寄せられた。

主催者としては、当初の目的どおり、参加者の方々に北方領土問題や四島交流事業の目的や果たしてきた役割について理解を深めていただけたものと考えている。

## (セミナー及び写真展示の様子)

会場の様子



工藤専門員 (道推進委員会)



上杉謙一氏・とみえ氏 (元島民2世)



塚本三樹夫氏 (ロシア語通訳者)



写真展示会場の様子



写真を観覧する来場者達



## II 講話要旨（講話の順による）

### 1 テーマ：「北方四島交流事業の現状」

講師：工藤 伸子（北方四島交流北海道推進委員会）

#### 【講話要旨】（講話資料を踏まえ事務局で整理）

##### （四島交流事業の概要）

- ・北方四島交流事業は、領土問題解決のための環境整備の一環であり、外交交渉を後押しするために行っている事業。ゴルバチョフ大統領からの提案（1991年）を受け、日本人と島に暮らすロシア人のお互いの理解を進め、領土問題の解決につなげるため、日ロ政府間で作った枠組みに基づいて1992年にスタート。
- ・北方四島への訪問には、四島交流の他、自由訪問、北方墓参の枠組みがある。事業実施のために、前年の反省や課題、次年度計画について実務者レベルで意見交換、調整（代表者間協議）を行う。
- ・2019年訪問（択捉：教育関係者・青少年）の例により、訪問の流れ（乗船・出港から四島上陸、視察・住民交流会等の島内日程、根室到着まで）を説明。2019年受入（ファミリー：根室管内）の例により、受入の流れ（根室港での四島住民出迎えから管内各町への移動と交流プログラム、見送りまで）を説明。

##### （別海町との関わり）

- ・別海町との交流は、1992年の四島交流事業開始当初からずっと続けられ、訪問・受入共に協力を頂いてきた。学校訪問、地域の団体との交流、音楽・舞踊・スポーツ交流、絵手紙教室等。地域で活動するボランティアサークル「サンキューの会」には、訪問・受入共に、四島住民との文化交流で特に協力をいただいていた。
- ・2019年ファミリー受入事業の滞在先「郊楽苑」でのエピソード。言葉がわからなくてもホテル側の気遣いや思いやりを感じ取っていた四島住民達が、滞在最終日に支配人との直接面会を希望、口々にお礼を言ってプレゼントを渡す。

##### （四島交流を取り巻く状況）

- ・四島交流について、推進委員会が実施した事業でこれまで13,669人の日本人・ロシア人住民が相互訪問。訪問と交流の積み重ねにより、誤解や不安が払拭され、信頼関係に基づく深い交流が出来、相互理解の増進が着実に図られた。
- ・2020年以降、事業が実施できず、日露関係は厳しい状況にあるが、政府の基本方針に変わりはなく、事業再開は今後の日ロ関係の中でも最優先事項。
- ・交流に参加したロシア人・日本人の意識の変化について：実際に会うことで誤解が解け、わかり合えることがある。そういった意味でもこの事業は大切で、話し合う必要があるということが関係改善のきっかけになるかもしれない。
- ・交流に携わった四島住民が今も続ける日本人墓地の整備の様子を紹介。すぐに草丈が伸びる真夏に墓地の手入れをする習慣がない筈の四島住民がお盆前後に草刈りをする理由：「本来なら元島民は自分でここに来て、自分達の手でこうしたいのではないか。」
- ・今日参加いただいた皆様には、これからも北方領土問題やビザなし交流に関心を持っていただき、今後もこのような機会にはご参加いただきたい。

## 2 テーマ：「戦後の北方領土」

講師：上杉 とみえ 氏（元島民2世（色丹島））

上杉 謙一 氏

【講話要旨】（講話資料を踏まえ事務局で整理）

上杉謙一氏から：

### （国後島の地理的近さ/北方領土問題の経緯）

・別海町尾岱沼（おだいとう）に暮らしており、天気の良い時は毎日島が近くに見える。国後島ケラムイ岬までの距離は16km。

・日本では8月15日を終戦の日としているが、世界では9月2日（日本が降伏文書に署名した日）あるいは翌3日とする国がある。太平洋戦争の始まりも北方領土であり、択捉島単冠湾に終結した艦隊が真珠湾に向かい、開戦の引き金になった。北方領土が占領されたのは9月1日から5日にかけて。艦艇や物資の提供、ソ連兵の訓練を行ったのが米国であることがわかってきた。今も昔も大国同士のやり取りの陰で翻弄されるのは地域住民。

・ロシアで出版された写真集「千の島を巡る・1946年のクリル探検」の写真を見ながら、戦後の四島における日本人とロシア人の混住時代を紹介。

### （妻・とみえ氏の両親の故郷について）

- ・写真集の色丹島チボイの様子。東方沖地震で岩が崩れる等、地形も変化。
- ・チボイはコンブの宝庫。戦前に日本が建てた色丹島最東端の灯台がある。
- ・色丹の墓地には木製の十字架が混在。北千島アイヌの強制移住について説明。

### （交流に参加して）

・2019年四島交流で訪れた国後島の思い出：島の新聞社の編集長がビジット家庭、歌や踊り、和太鼓を披露した住民交流会、島の高校生達と話すことができた夕食交流会。その後、コロナ禍、ウクライナ情勢が続き、島には行けなくなった。

・各島を訪問し、国が子どもの教育に力を入れている様子が印象に残った。自分もトドワラを訪れる観光客等多くの人に伝えるようにしている。子どもから大人までその年代に合った教え方が必要。これからも機会あるごとに話し、広めたい。

### （参加者へのメッセージ）

・膝を突き合わせ、顔を見ながら相手と話すことで、理解につながる。今の状態ではそれも叶わない。一日も早く、そうしたことが出来る日が来ることを願っている。

上杉とみえ氏から：

### （元島民や両親から聞いた島の話）

・尾岱沼は国後から近く、元島民、特に国後島からの引揚者が多く暮らしている。

・「元島民が100人いたら100の物語がある」と言った人がいる。「終戦直前に亡くなった姉の骨を埋葬できず、箆笥に隠したまま島を脱出し、ずっと気になっていたが、島に戻れた時

には 50 年が経っていた。筆筒どころか家さえ跡形もなく、どこに手を合わせたら良いかわからなかった。」という話を聞いた。「帰れる時が来たらずぐに帰れるようにと思い、島が良く見える場所に住んだ。自由に往来させてほしいと言いたいだけなのに、今はロシアと話し合うことすら出来ない。」

#### (実際に訪れた島の様子)

・平成 6 年に北大練習船「北星丸」に乗って初めて墓参に参加。以来 9 回島を訪問した。母が家の場所を覚えていて、教えてくれた。

・平成 17 年に父が他界。父からは直に島の話を受けなかった。親から島の話聞いていない後継者も多い。遺品の中から、父が島の様子を書いた記録帳を発見し、今も語り部をする上で大事な資料になっている。

・平成 25 年、90 歳の母が最期の墓参かもしれないと言い、母と兄と墓参に参加。母は 97 歳で他界したが、最後まで故郷の話をしていた。

・島の住民達と話をした時、共住に前向きなのが印象に残った。その後、島の開発が進み、対話集会も意見交換会へと変わっていった。

・写真を紹介しながら、訪問の様子（出港、上陸、草刈り、慰霊式、島の施設等）を説明。

#### (参加者へのメッセージ)

・後継者も高齢になり、3 世、4 世に繋いでいかなければならない。元島民だけの問題ではなく、日本人皆の問題である。皆さんには、この問題に関心を持ち、広めてほしい。

#### (質疑応答)

Q:終戦当時 1 万 7 千人いた元島民が 5 千人を割り込んだことが新聞で報道された。今後、後継者が語る機会・重要性は増えると思うが、後継者として伝える上で苦勞すること、また、逆に 2 世だからできると思うこと、伝えたい想いがあれば教えてほしい。(公務員)

A:(謙一氏) 実体験として、言葉がよくわからない相手でも顔を合わせながら酒を酌み交わし、話が通じることを何度も経験してきた。お互いが思っていることをしっかり話し合っ、聞いたことを伝えていきたい。歴史を伝えることも大切だが、今のことも大切。石破総理に替わってから、最近ロシアが日本に揺さぶりをかけているように感じ「そう遠くないうちに何かが変わるかもしれない。墓参等の事業から出来るようになるのでは。」というかすかな期待がある。伝え続けるためにも、健康に気を付け、これからも研鑽を積んでいきたい。

(とみえ氏) 国後に行った時、小学校低学年位の子どもでも「大戦でロシアが日本に勝ったから、島はロシアのものになった。」と、はっきり答えることに驚いた。日本の学校でももっと力を入れ、教育で北方領土問題について教えてほしいと思う。

### 3 テーマ：「通訳者からみた四島交流」

講師：塚本 三樹夫 氏（ロシア語通訳者）

【講話要旨】（講話資料を踏まえ事務局で整理）

#### （自己紹介）

・父方の祖父母が樺太引揚げ、ロシア人との2年間の混住を経験。自分は札幌出身でモスクワ大学に留学、会社勤務を経て通訳の道に進む。別海には受入事業で12回、今回7年ぶりに来た。

#### （ソ連からロシアへ/通訳業務の急増）

・ロシア革命以降の為政者達を紹介しながら、歴史・時代背景を説明。レーニンからプーチンまで主な為政者は7人しかおらず、日本と比較して長期政権が多い。

・1980年代後半からロシア関係のニュースが増えた。ソ連崩壊後、通訳の仕事が急増：対旧ソ連的支援事業、国際会議、青年交流、地方自治体（特に日本海沿岸）の独自の交流、学術シンポジウム、石油ガス関連、スポーツ関連、ニュースの吹替・字幕等。

・1992年最初の受入事業の回想。釧路から札幌へ向かうJR車両の狭い通路に報道機関約20社の記者が詰め、順番に訪問団のいる車両に入って突撃取材を繰り返す騒ぎ。

・四島交流事業の通訳の特色・専門性：皆の知っている前でする仕事と、見えない所でする仕事。中間ラインでの無線交信や入出域手続。お互いに絶対に譲らない表現や地名の違い。地名対照表がA4のリストで約8枚あり、事前に確認する。

#### （対話集会の変遷）

・お互いに往来し実際に島を見ることも重要だが、何を思ってこの事業に参加しているかをはっきり言わなければいけない。対話集会は交流で一番重要なイベント。

・対話集会の名称も内容もどんどん変化した。最初の頃の対話集会は30～40人が向き合って完璧な対決姿勢を取り、テーマも「北方領土の解決に向けて」のように直接的だった。

・平成22年ユジノサハリンスクで行われた北方四島交流代表者間協議で島側から領土問題に関する対話集会に難色が示されたこと等を受け、対話集会は意見交換会等に名称を変更、テーマも「学校生活について」「余暇の過ごし方」などソフトなものになっていった。

・四島のロシア人住民も実は1945年に実際に起きたことを学校で習っていない。ロシア側から見た一方的な“歴史”を教えられているだけ。どんなに嫌な顔をされても、不法占拠については言い続けるべきである。

#### （四島交流事件簿）

・北海道で研修したロシア人医師・看護師を四島に送っていた帰路途中、無線で「その漁船」と呼びかけられ、無視していたら軍艦が近づいてきて、4時間臨検されることに。

・受入事業中に漁船拿捕銃撃事件が発生。数日後の択捉島訪問時に、国後沖で遺体引取り現場にも居合わせる、他。

#### （参加者へのメッセージ）

・「ビザなし交流」は手段であって目的ではない。目的は北方領土問題を解決して平和条約を締結し、元島民や後継者達が行きたい時に島に行けるようにすること。

・ロシア側が「日本との関係改善が必要」と思う時が来る。その時に「日本は北方領土問題解決を最優先にしている。」とすぐに喚起させるよう、我が国の主張を言い続けていくことが重要。

### Ⅲ アンケート結果

#### 1 アンケート概要

##### (1) 目的

今後の取組の参考とするため、参加者の年齢や職業、参加のきっかけ、講話内容などについてアンケート調査を実施した。

##### (2) 調査方法

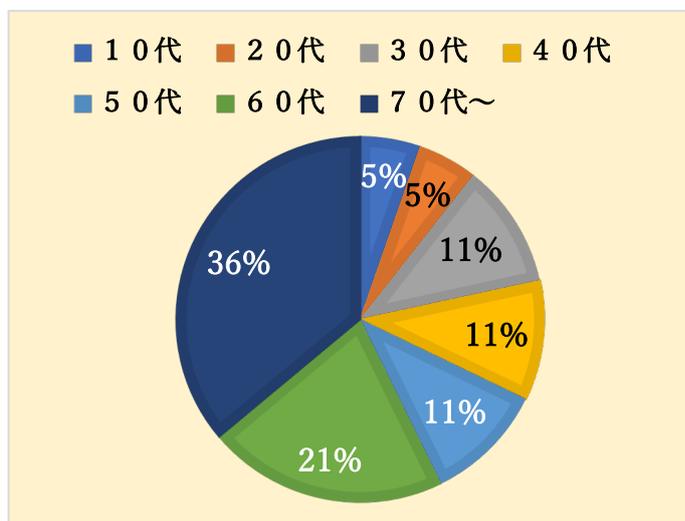
会場で調査票を配布・回収した。(設問は選択方式(一部複数回答可)及び記述式)

##### (3) 回答率

参加者 32 名中、19 名が回答 (回収率：59.4%)

#### 2 調査結果

##### Q1.→あなたの年齢を教えてください



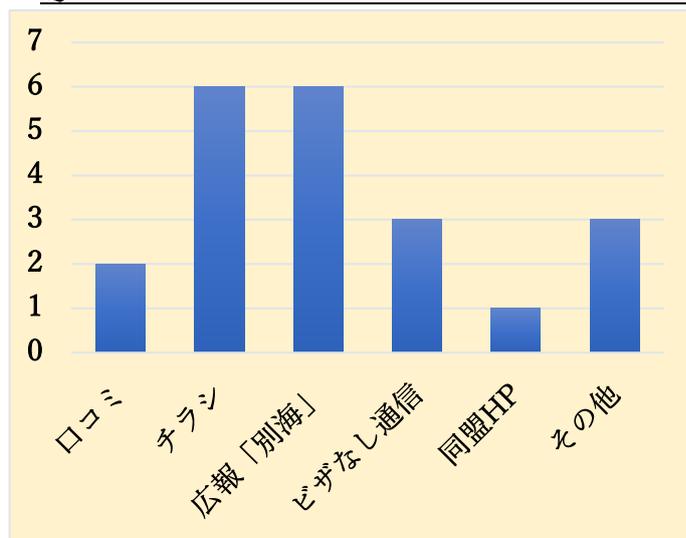
参加者の 6 割近くが 60 歳以上だったが、10 代の参加者もいた。

##### Q2.→あなたの職業等を教えてください



返還運動関係者が約 3 割、公務員が 2 割以上を占め、他に会社員、自営業、中学生等がいた。

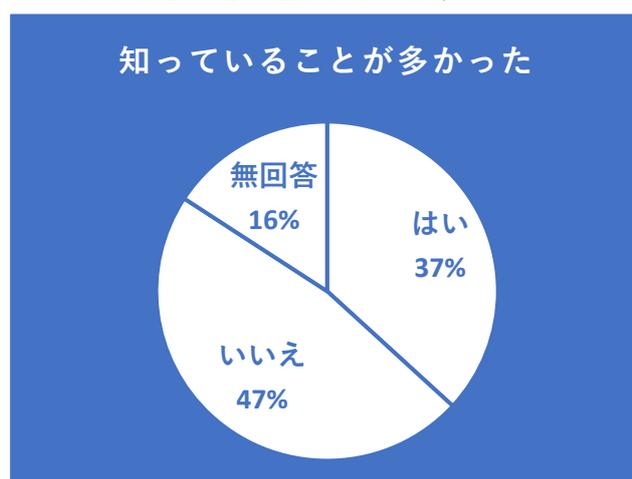
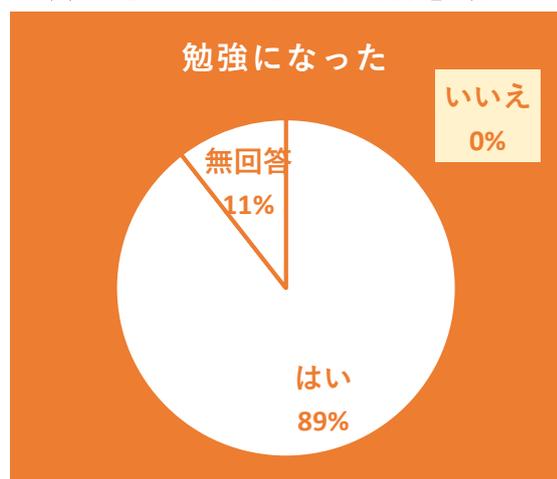
Q3.→このセミナーを知ったきっかけは何ですか（複数回答可）



「チラシ」・「広報」が多かったが、「ビザなし通信」、「HP」、「口コミ」等の回答もあった。

Q4.→講話の内容についてお聞かせください

(1)「北方四島交流事業の現状」（講師：北方四島交流北海道推進委員会職員）について

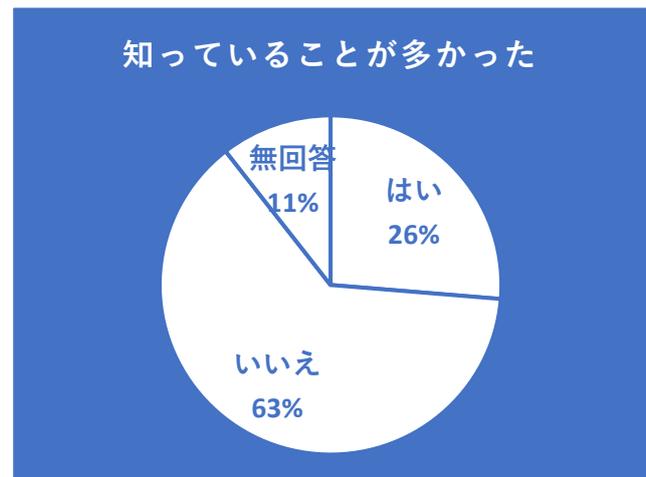
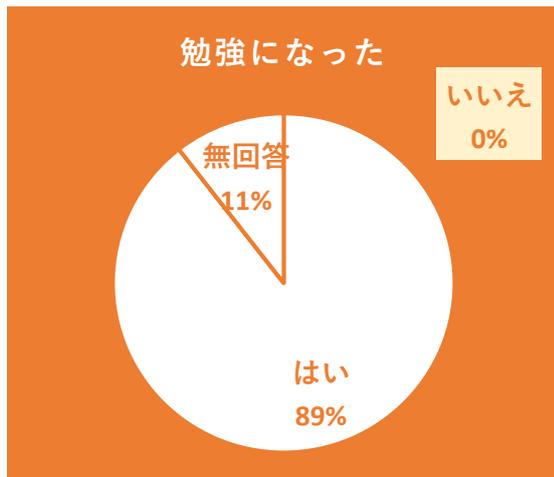


参加者の9割近くが「勉強になった」と回答、「知っていることが多かったか」という設問には半数近くが「いいえ」と回答した。

その他、感想：(主なもの)

- (講話内容について)
- ・具体的な話や写真等による説明を受けて、非常に参考になった。(70代以上・無職)
  - ・とても聞きやすく、わかりやすい説明だった。(50代・公務員)
  - ・仕事柄内容は知っているが、改めて認識することも多かった。(60代・返還運動関係者)
- (印象に残ったことや感想等)
- ・交流事業が相互の理解促進に大きな役目を果たしている事を知り、途切れてしまった今だが、再開につなげていく努力が必要と感じた。(10代・中学生)
  - ・交流事業に実際に関わったことがないので、どんな風景か伝わってきて良かった。(20代・公務員)

(2)「戦後の北方領土」(講師：元島民2世)について



参加者の9割近くが「勉強になった」と回答、「知っていることが多かったか」という設問には6割以上が「いいえ」と回答した。

その他、感想：(主なもの)

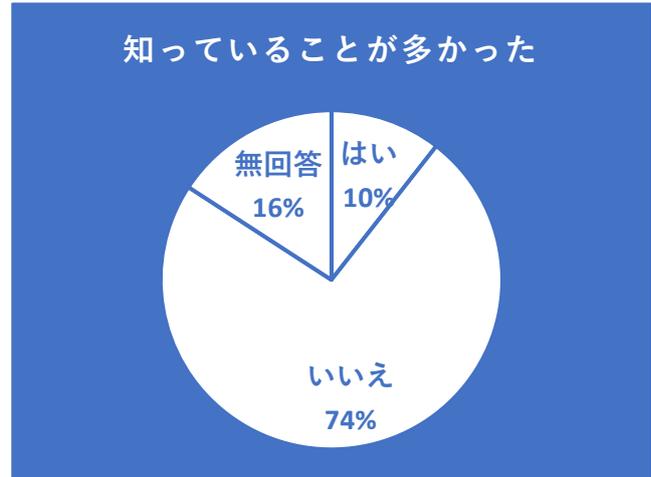
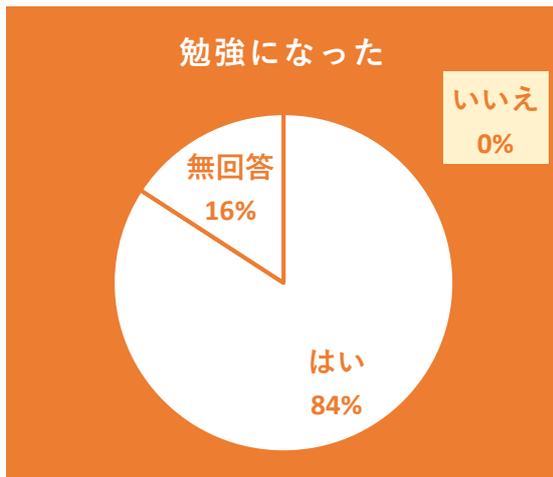
(講話内容について)

- ・初めて見る情報が多く、非常に勉強になった。(40代・公務員)
- ・写真が多くあり、島の様子等を知ることができた。講師の声が聞きやすく、元島民から聞き取った話に心を打たれた。(70代以上・その他)
- ・写真を利用した説明は分かりやすかった。(60代・返還運動関係者)
- ・戦後からごく最近までの島の変化がよくわかった。(60代・返還運動関係者)

(印象に残ったことや感想等)

- ・上杉さんのご両親の故郷の風景が変わっていくことに考えさせられた。私の知り合いには島民の方がいなかったなので、とても勉強になった。(10代・中学生)
- ・元島民・元島民2世の方がどんな想いで活動しているかが伝わってきた。(20代・公務員)
- ・たいへん勉強になった。墓参再開を祈っている。(50代・公務員)

(3)「通訳者から見た四島交流」(講師：ロシア語通訳者)について



参加者 8 割以上が「勉強になった」と回答、「知っていることが多かったか」という設問には 7 割以上が「いいえ」と回答した。

その他、感想：(主なもの)

(講話内容について)

- ・「ビザなし交流は手段であって目的ではない」ということに共感した。(60代・返還運動関係者)
- ・興味深い話が多く、話も面白かった。(40代・公務員)
- ・通訳者から見る視点は全く違うと感じた。(10代・中学生)
- ・四島の発展等がわかった。(20代・公務員)

(通訳の仕事について)

- ・通訳業務の大変さが理解出来た。(50代・公務員)

(返還運動について)

- ・日本人の主張をはっきりさせ、今後の立場を明確にしていくことが大切。(70代以上・その他)



# 共に考える 四島交流

北方四島交流事業  
理解促進セミナー

## ◇◇ プログラム ◇◇

13:30～ 「北方四島交流事業の現状」  
道推進委員会 工藤 伸子

14:00～ 「戦後の北方領土」  
元島民2世 上杉とみえ氏・上杉謙一氏

15:00～ 「通訳者からみた四島交流」  
ロシア語通訳者 塚本 三樹夫 氏

# 12/7(土)

開場：13:00

別海町生涯学習センター  
「みなくる」  
2階会議室

【問い合わせ先】

参加無料 どなたでもご参加できます (先着90名まで)

主催：(公社)北方領土復帰期成同盟 (北方四島交流北海道推進委員会)

別海町総合政策課

TEL：011-221-3340

TEL：0153-74-9502



# 北方四島交流事業理解促進セミナー【別海町】



## 1 目的

令和2年度以降、北方四島交流事業が実施できない状況の中、北方同盟では、現在の情勢が改善された際に事業をいち早く再開できるよう、関係機関と連携し準備を進めるとともに、北方四島交流事業への理解促進のための取組を行っています。

このたび、北方領土隣接地域＝交流の窓口として開始当初から連携・協力頂き事業を展開してきた別海町で、事業を紹介する写真の展示やセミナーを行い、一般の方や関係者の皆さんに北方四島交流事業に対する関心及び理解を持ち続け深めて頂くこととしました。

## 2 テーマ

「共に考える四島交流」

## 3 主催

(公社)北方領土復帰期成同盟 (北方四島交流北海道推進委員会)  
別海町

## 4 日時・場所

催事名	日 時	場 所
セミナー	令和6年12月7日(土) 13:30～16:00	別海町生涯学習センター 「みなくる」2階会議室
写真展示	令和6年12月7日(土)～ 12月8日(日)15:00	別海町生涯学習センター 「みなくる」1階ホワイエ

## 5 対象

どなたでもご参加できます(先着90名まで)  
(別海町外の方も是非お越し下さい)

## 6 内容

### (1) セミナー

北方四島交流事業の現状についてご説明するとともに、四島訪問やロシア人住民との交流に参加した方から、実体験を踏まえて各々の立場・視点に立った講話等を頂き、参加者との質疑応答・意見交換を行います。

時 間	講話テーマ	講 師
13:30～	北方四島交流事業の現状	道推進委員会 工藤 伸子
14:00～	戦後の北方領土	元島民2世 上杉とみえ氏・上杉謙一氏
15:00～	通訳者からみた四島交流	ロシア語通訳者 塚本 三樹夫 氏

### (2) 写真の展示 これまでの記録写真を展示し、北方四島交流の様子等を紹介します。

※セミナーの様子の写真等については、主催者のHPへの掲載や関係機関への提供等を行うことがありますので、ご了承願います。

※セミナー内容は当日変更する場合がありますので、ご了承願います。

来場者には記念品の  
プレゼントがあるッピ!



↑ボールペン、ブックカバー  
&ポケットティッシュ

